

偉大なキャンプ長との 出会いが人生を決めた

武田 建 Takeda Ken

元神戸 YMCA 余島キャンプリーダー
元関西学院大学学長、元理事長
元同大学・高等部
アメリカンフットボール部監督



▼今井鎮雄キャンプ長との出会い

関西学院の高等部時代から今井先生に連れられ、山中湖のハイ Y キャンプに行き、大学生になったらリーダーになりたいと思っていました。当時のリーダーはみんな今井先生の本釣りでした。キャンプを知っている大学生なんかほとんどいなかったでしょう。

▼余島キャンプと今井キャンプ長

今井先生からリーダーとして訓練を受け、先生が米国で勉強してこられたばかりの グループワークという指導法にあこがれ、先生のようにになりたいと思うようになりました。余島キャンプは 1950 年にスタートしましたが、1953 年には 11 泊 12 日の長期少年キャンプを始めたのです。グループワークを指導法の中心においた余島キャンプでは、グループ活動と平行してキャンパー個々の成長に取り組むことが強調されました。先生は「グループはメンバー個人の成長のためのもの」だと説かれました。子どもたち同士の関係性、リーダーの関わりの中から成長していく子どもたちの姿。それを見つめる今井先生のまなざしや行動、そして先生の言葉によってさらに刺激が与えられました。それを目の当たりにした私たち学生リーダーは先生の教えに傾倒し、その実践に必死で取り組みました。わたしは「先生のようにになりたい」と思い、ついには大学 3 年の時に関西学院大学で社会事業学科が誕生したのを機会に転学科をしました。ここでは、今井先生がグループワークの講義を持たれていたからです。こうして、キャンプでも大学でも先生のご指導を受けました。

1932 年生まれ、1956 年関西学院大学大学院教育学専攻修士課程修了、1962 年ミシガン州立大学大学院カウンセリング心理学専攻修了 Ph.D. 関西学院大学社会学部長、同大学学長、理事長を歴任。関西学院大学・高等部アメリカンフットボール部監督 18 年間に全国優勝 13 回

▼さらなる知識を求めて北米へ → もっと勉強をしたい

関西学院では教育学の大学院へ進みましたが、私の関心は常にグループワークにありました。大学の恩師たちの勧めもあり、北米の教会の留学試験を受け、カナダのトロント大学の社会福祉大学院で念願のグループワーク専攻に入学しました。英語は多少読めても話せない聞けない留學生活でしたが、余島キャンプで身につけたグループワークの実践が大いに役立ちました。博士課程ではグループを構成する個人に焦点を当てて勉強したいとミシガン州立大学のカウンセリング心理学専攻にゆきました。ここでの勉強は一般の臨床活動だけでなく、キャンパーの理解とどう接するかに役だったと思います。

6年半という長い留學生活になりました。その間、社会福祉とカウンセリングの勉強に明け暮れていましたが、夏は必ず子どものキャンプに参加してリーダーをしました。YMCAのキャンプだけではなく、身体障害児や貧困家庭の子どものキャンプ、また超リッチな子どもキャンプのリーダーも経験しました。博士論文はキャンプで子どもの「対人認知」について実験と調査をおこない書きあげました。大学院で習った調査法や統計学を実践に生かした最初の経験でした

▼帰国

日本へ着いたら最初にしたかったことは余島キャンプに行くことでした。神戸港から船とバスを乗り継いで対岸から見る懐かしの余島キャンプです。途端に大粒の涙が流れてきました。昔ながらの渡し船でキャンプに着くと、恩師の今井先生が迎えて下さいました。「ただいま」も「帰って来ました」も声にならずただ泣きながら先生と握手をしたのです。食堂へゆくと大勢の子どもたちがキャンプソングを大合唱していました。わたしがリーダーだった頃と変わらないキャンプライフがここにありました。世代を超えても受け継がれる、心の古里とはまさにこのことだ、と思いました。

▼リーダーのお役に立ちたい

帰国して母校関西学院大学で社会福祉とカウセングの教員をしながらアメリカンフットボール部の監督という二足の草鞋を履く羽目になった私でしたが、何とかやりくりをして、短い期間ですが夏休みには余島キャンプへゆきました。歳をとった私にできることは、直接子どもたちに関わるのではなく、リーダーが書いた子どもたちとグループの記録をひたすら読み、赤鉛筆で励ましのコメントを書き、対応策をメモすることでした。昼寝の時間には各キャビンにプログラムのリーダーをおくって、キャビンリーダーを集めて、子どもの行動について話し合ったり、困っているリーダーを支えたり励ましたりする、サポートの時間をつくりました。でも、歳をとっても子どもと遊びたい私は水泳の時間に水に入りたがらない子どもを集めて、砂浜で遊びながら、毎日少しずつ水に近づくゲームをやって楽しみました。

歳をとってから、キャンプに行ってリーダー達と子どもやグループについて話し合い

もしました。リーダーの成長は子どもたちの成長につながります。リーダー達はやがて社会人となり、家庭を持って自分の子どもを育てるようになります。自分の子どもが巣立ったら、社会や家庭での経験と知識を携えてキャンプに帰ってきて、第一線で身体を張って子どもたちの世話をするリーダーを後ろからそっと支えてくれるならば、リーダーたちにとっては大きな励ましになるでしょう。わたしがそうした働きができたとしたら、私を導いてくださった【偉大なキャンプ長】への恩返しになるのではないかなと思うのです。

“偉大なキャンプ長” 今井 鎮雄 Imai Shizuo Profile

1920年、東京生まれ。同志社大学卒業後、1946年灘購買組合勤務。1948年より神戸YMCA主事、1963年から同総主事。国際ロータリー元理事、頌栄短期大学元学長、啓明学院元理事長 兵庫県教育委員、神戸市社会福祉協議会元会長、兵庫県青少年本部理事長など公職多数

余島キャンプ開設に尽力し、初代キャンプ長として子どもたちの成長を見守り続けた。2014年11月永眠。

Y Camp 100 Stories vol.005



キャンプの経験は人を育て その人の人生を変える

武田 寿子 Takeda Toshiko

元神戸 YMCA 余島キャンプリーダー
学校法人神戸滋慶学園
神戸製菓専門学校校長
前神戸YMCA理事長
日本YMCA同盟監事

1941 年生まれ。日本航空国際線客室乗務員を経て国際耳鼻咽喉学会連合事務局専務秘書、その後大阪医療技術専門学校専任講師、同校副校長を経て現職。神戸 YMCA 理事や理事長、またアジア太平洋 YMCA 同盟、世界 YMCA 同盟の常務委員などを歴任。夫、武田 建氏との間に一男一女

▼キャンプの意味

アメリカでは父親は子どもに、野球と釣りとキャンプを体験させることで人生の生き方を教えると言います。野球はキャッチボールで、いかに相手の受けやすいボールを投げるかを工夫し、コミュニケーションの大切さを学ぶ。釣りは忍耐を、キャンプでは、生きることの原点を身に付けさせるのだと。

▼リーダー活動に夢中だった女学生時代

私が初めて YMCA キャンプと出会ったのは、リーダーとして参加した神戸 YMCA の山のキャンプでした。神戸 YMCA の今井鎮雄先生が、実験的に神戸の北部の山田に 1959 年の夏に行ったキャンプです。休耕田にパネルを敷きつめテントをはり、かんがい用水をプール代わりに使用、井戸掘りから始まった原始的なキャンプでした。困難な状況の中でいかに安全で楽しい状況をキャンパーのために作り出すかを学んだ貴重な体験でした。それ以来、YMCA キャンプのリーダー活動に夢中になり、山のキャンプはもちろん、余島の長期少年キャンプへもリーダーとして参加しました。YMCA キャンプに参加する子どもたちの楽しそうな笑顔と歓声に魅了され、結局学生時代の夏は家で過ごした記憶がなく、50 年以上前の女学生としては、かなりのアウトドア派だったと思います。

さらに、私の活動範囲は YMCA キャンプだけにとどまらず、女学校や教会で行われるキャンプにもカウンセラー（リーダー）として参加するようになりました。楽しいキャンプに夢中だった女学生時代の最終学年に、忘れられない出来事が起こりました。

▼キャンプとの出会いが人生の原点

1959 年 9 月、巨大な台風が東海地方に上陸し甚大な被害が発生しました。いわゆる「伊勢湾台風」です。神戸 YMCA から救援活動ボランティアが派遣されることとなり、私はこの救援活動に駆け付けました。数々のキャンプのリーダー活動で私が学んでいたのは、他者の痛みを共有し、できるときに自分のやれることをする、という生き方でした。こ

の救援活動へ参加することは、私にとって極めて自然なことだったのです。アメリカの父親がキャンプを通して教えるという、「生きることの原点」を、私は YMCA キャンプを通して身につけていたのだと思います。

その後、就職、結婚、子育てなどしながら、神戸 YMCA をはじめ、アジア太平洋 YMCA 同盟、世界 YMCA 同盟の常務委員などをしてきました。インド洋で起こった大津波や、自然災害、紛争などに苦しむ国にある YMCA に、世界中の YMCA が協力の手を差し伸べて、ワークキャンプを行い、支援をし、痛みを分かち合っているのを肌で感じることができました。この YMCA 運動の素晴らしさをもっともっと今の若者に知ってもらいたいと思いました。

▼これからの YMCA とキャンプへの期待

神戸 YMCA とチャンマイ YMCA との若者のワークキャンプが 30 年を越えて継続されています。タイの北部の寒村で両国の若者が、地域が必要としている建物を建設するために汗を流し、チームを組んで働く貴重な経験をし、その後グローバルな視点を持ったリーダーとして各分野で活躍しています。

また神戸 YMCA を支える多くの理事、役員が若い日にキャンパーやリーダーとしての体験があり、それが YMCA 運動を支える原動力になっていると実感しています。

聖書の中に「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたことは、すなわち、わたしにしたことである」というイエス・キリストの言葉があります。弱い立場にある人を「兄弟」と言われたキリストの生き方に倣うことは、キャンプリーダーの原点ではないでしょうか。

【取材：神戸 YMCA 尾上 尚司】